



世界を知ろう、「終わり」を始めるために

石川県立金沢泉丘高等学校 3年 道原 萌乃

突然だが、人々は「戦争」と聞いて何を思うだろうか。私は、これは人類史上絶えず世界中で起こってきたものであり、今後もとどまることを知らない、いわば人間にとって皮肉にも常に隣り合わせにあり続ける存在だと思っている。

私はTVや新聞等の報道で、人が競い殺し合う戦争の残酷さや、その影で争いがもたらす弊害に苦しむ人々などを目にしてきた。そのたびに、紛争や貧困といった厳しい状況に置かれている人と日本人である私は、同じ地球に生まれた人間なのにこんなにも違った環境で生きている、という事実を胸に突きつけられる。そして、本当に悲しい世界だ、と痛感するのである。

そんな中、一人の女性の行動と言葉が、私、いや世界中の人々の心を揺さぶった。そう、その女性とは、マララ・ユスフザイさんだ。彼女は、昨年10月にノーベル平和賞を受賞した。

「教育は人生の恵みの一つであり、生きる上で欠かせないものです。…戦争で子供の命が失われることも、子供が学校に通えないことも、これで終わりにしましょう。私たちが終わらせましょう。今、ここからともに、この『終わり』を始めましょう。」

これは、そのときに彼女が発表した受賞スピーチである。彼女の人生そしてこの言葉を知ったとき私は、前述したように、「戦争」という名の悲しく醜い暗黒に命をおびやかされる人々の存在を改めて知る。と同時に、自分たちが何気なく通っている学校や、かけがえのない友人、今こうして私に文章を書かせてくれている紙とペン…意識してみるとキリのないくらい多くのものに、心から、感謝しようと思った。私たちの身の回りにあるもの全てのおかげで、私たちは毎日成長し続けることができているということに気がついた。そして、紛争や貧困に苦しむ人々を見たとき、それを、TVや新聞の向こう側のどこか日本からは遠い国のことだと思っただけではいけないと思った。ただ「悲しい世界だ」で終わらせてはいけないと思ったのだ。実に私と同じ年のマララさんの訴えに、私は刺激された。彼女の意志を、広く後世に伝えていきたい。

私は高校の世界史や地理の授業で、今日まで続く、国境を越えた紛争や対立・その原因について多くのことを学んだ。それは宗教や領土が絡んだ問題で、複雑なものも多い。そして、学べば学ぶほど私はこう強く思うのだ。その宗教や領土の本当の歴史について、対立する彼らが共通の理解をすれば、争いは消えるのではないかと。どんな争いも、人間どうしの方向性の違いから生まれる。それは、その宗教や領土に対する、彼らのゆきすぎた勘違いや間違った解釈、多くの誤解から生じるのだと私は思う。このエッセイコンテストのテーマは、「世界を知ろう！考えよう！」だ。まさにこれである。世界中の人々に、今不足していることだ。世界を知って、考えてみてほしい。対立する彼らに、本当の意味での世界の歴史を、一緒に分かち合っしてほしい。今日までの歴史を知ることができれば、明日からの未来をどこまでも新しく塗りかえることができる。私はそう信じているから。

私には、これといった明確な将来の夢がまだない。それでも、もっと勉強して成長してから、将来は日本以外の地へ赴いて、世界にもっともっと触れて、色々なことを吸収したいと思う意志は、ずっと変わらないだろう。そして、どのような形で実現させられるかは分からないが、貧困や紛争に苦しむ人々の役に立てる大人になりたい。

世界の72億人分の1人として、自分にできることは何か。気持ちのあり方次第で、そこから広がる可能性は無限大だ。一人一人が世界を知り、考える。これこそが、私たち若者が託された使命だ。